

シュレーゲルの言語有機体説

——マラルメの言語論についての覚書（Ⅲ）——

高橋 達 明

覚書(Ⅱ)に訳出したように、マラルメは『英語の単語』(1878年)の「序論」の一節で言語の定義を、あるいは少なくとも「言語とは何か」というみずからの問いに対する解答を提出している。この著作は、「言語についてのノート」が一端を記録している1870年前後の言語学の勉強の一つの延長線の上にあるものと考えられるから、「ノート」を読むにあたって、マラルメの内観的方法をこの定義からふりかえることもひとまず許されるだろう。そこで、これをもう一度読みなおしてみれば、

Si la vie s'alimente de son propre passé, ou d'une mort continuelle, la Science retrouvera ce fait dans le langage: lequel, distinguant l'homme du reste des choses, imitera encore celui-ci en tant que factice dans l'essence non moins que naturel; réfléchi, que fatal; volontaire, qu'aveugle. [OCa. 901]

まず、「言語は生きている」という figure du discours [OCa. 901] が生命の生理学的な把握によって一層具体的な内容をそなえるにいたっていることがわかる。言語が生きているとは、それが不断に死ぬことであり、逆もまた真。代謝の連続的過程にあって変化しつつ、言語は存続する。ガストン・パリスがどこかで言ったそうだが、ラテン語がロマン諸語の中にいまも生きているように。しかも、言語の生命は、これを人間的現実から切り離すことはできない。言語は第一に、「人間を他の動物から区別する」指標であり、したがって、第

二に、人間とその環境世界に「素材」をもとめ、それらをもちいて、「生命のすべての現象を言い表すことを任されている」〔OCa. 901〕からである。こうして、言語は人間を模倣する。そのありさまは、貝殻が貝を模倣する現象に似ているといえなくもない。このとき、「科学」が言語に関係する脳の作用を外套膜の分泌作用に等しいとするならば、自然主義のもっとも徹底した形態が生まれるだろう。それはほぼ覚書(Ⅱ)に見たシュライヒャーの主張であるといえる。しかし、それほど極端でなくとも、マラルメの考えは自然主義に必ずしもそうものではない。

引用文にあるように、マラルメは言語の「本質」を、作り物 *factice* であって、自然的 *naturel*, 内省的 *réfléchi* であって、運命をまぬがれず *fatal*, 意志的 *volontaire* であって、盲目的 *aveugle*, という三組の形容詞で表現した。これらの語の使用はいうまでもなく二項の対比を前提としている。すなわち、

I	II
<i>factice</i>	<i>naturel</i>
<i>réfléchi</i>	<i>fatal</i>
<i>volontaire</i>	<i>aveugle</i>

語彙の選択が人間の「本質」の把握をもとになされていることは、言語が人間を模倣するという考えからして当然のことだが、そのためもあって、概念のレベルが幾通りにも重なって、複雑な対立と結合を生み出している。たとえば、*factice*を人為的、制度的、社会的という意味のひろがりの中にとらえるなら、言語は作り物であって、自然の産物 *naturel* ではなく、人間の意志にもとづく *volontaire* ことになる。言語は言語外の現実とも言語的現実（意味の世界）とも自然的な一致を示さない。いいかえれば、現実との関係において恣意的 *arbitraire* である。したがって、偶然性が問題になる。しかし、この恣意性は、同時に、ある個人と母語との共時的な関係においては、言語が *naturel* であることを妨げない。そのとき、*naturel* は *fatal* に同義であり、必然性を意

味する。その限りでは、言語は偶然性を排除した、aveugle な、つまり絶対的な所与である。このような対立と結合が言語記号の性質をめぐる議論であるのみならず、観念の起源および言語の起源についての古来の論争に結ばれていることは、たとえば、デカルト哲学の *idée factice* の概念および十七世紀のアダミズムの言語の自然性の主張に照らしてうかがうことができる。そして、これが大切なところだが、起源問題は、マラルメの「ノート」の表現に従えば、「精神」の問題に他ならない（「精神とは何か、物質と人間性というその二重の表現に比較して」 [OC. 507-508]), という具合である。

そこで、ⅠとⅡの項を、Ⅰを機能主義、Ⅱを自然主義と、シュライヒャー流の自然（科学）主義を含めて、広義に、名づけてとらえかえすことにしたい。ここにいう機能主義はロックの経験論を源泉とするが、『人間知性論』（1689年）第三卷第二章第一節の次のような所説を参照すれば、マラルメが自然主義のみならず、機能主義の言語論をも視野におさめていたことがわかる。

わたしたちはこうして、言葉 *Words* はその本来の性質からして〔思想の伝達という〕目的に見事に合っているのだから、人間がどのようにして言葉を、観念の記号として使用するにいたったかを思い描くことができよう。それは、特定の分節された音声と一定の観念のあいだにある、なんらかの自然的な *natural* 結合によるのではなく、もしそうなら、万人のあいだにはただ一つの言語しかないであろうから、かえって、意志的な *voluntary* 賦課によるもので、それによって、これこれの言葉は恣意的に *arbitrarily* これこれの観念の印とされることになる¹⁾。（鉤括弧内、筆者。以下、同様）

いま H. Aarsleff の見解に従って、ロックの言語論がコンディヤックと啓蒙思想家たちをへてブレアルにつながると考えるなら²⁾、機能主義がマラルメを触発するのは十分ありえたことである。覚書（Ⅰ）と（Ⅱ）に若干ふれたように、ブレアルは比較文法学者としてシュライヒャーの自然主義を批判し、同時

に、従来の比較文法の組み替えを提唱して、『意味論』（1897年）によって、これを実践するが、そのような主張は1860年代から繰り返し発表されていた。したがって、マラルメの引用文の上のような分析がロックの言語論に符合するとしても、なんら不思議はない。加えて、シュライヒャーの死後にはじまり、ミュラーがうけて立ったホイットニーの自然主義批判もまた、かえって、マラルメの機能主義の理解を深めるのに役立ったにちがいない。本稿以下、シュレーゲルからはじめて、この言語有機体説をめぐる論争をとりあげてゆくが、なお一言、マラルメの思索が機能主義と自然主義を折衷するかのように見えることについて述べれば、問題はこの折衷主義自体にはなく、それがどういうメタフィジックを蔵しているかというところにある。メタフィジックの露頭は、マラルメの語彙で言えば、*réfléchi* である。「ノート」の分析はいずれそこに届くべきだが、すでにして予見できるごとく、この露頭が深く掘削された暁には、折衷主義という名札は霧のごとくに消え去るだろう。

さて、言語有機体説は古く Friedrich Schlegel (1772-1829) の『インド人の言語と知恵について』（1808年）の第一巻「言語について」に姿を見せている。この書はまた「比較文法」という名称の使用によって名高い。しかし、言語学の正統的な歴史記述、それは言語学史を、Franz Bopp (1816年) あるいは Rasmus Rask (1814/1818年) の著作によって成立して以後、ドイツで発展した比較文法の歴史に等しいものとして、19世紀以前の言語研究（とくに、語源学と言語起源論）とのあいだに明瞭な断絶を設定してきたが、その歴史記述が1960年代から見直しの波をかぶってきた現在³⁾、シュレーゲルの「比較文法」の評価もかなり分かれるようである。「印欧語族と印欧祖語の発見者」である William Jones (1746-1794) についても、同じである。いま、この人をもちだすのは、ブレアルがシュレーゲルの源泉をつとにジョーンズの一連の講演論文に認めているからであり⁴⁾、また、シュレーゲル自身、第一巻の最終第六章の末尾でジョーンズを「回顧」しているからである。話は少しややこしくなるが、黎明期の学問のありさまを知るには、この異例の文章を引用するにしくはない。

ジョーンズはラテン語、ギリシア語、ドイツ語、ペルシア語がインド語〔サンスクリット〕に類似し、それに由来することを指摘して、従来暗い紛糾の中にあった言語の学問に、ひいては最古の民族史に光を投げかけた。さらに、この類似を、およそ似通っていない他の二三のケースに拡張し、なお、不定数の多くの言語をインド語族、アラビア語族、タタール語族という三つの主要部門へと引きもどし、ついに、アラビア語とインド語がまったく相異なることをはじめて見事にみずから確認したあと、最後には、ひたすら統一を好むがために、すべての〔民族の〕起源を一つの共通の源にもとめようとする。だから、私はそれらの部分についてはこの卓越した人物に従うことはできなかったけれども、本論文を注意深く読んでくださるなら、私の所説に明快に同意していただけるであろう。〔SWI. 189〕

引用文に見えるように、ジョーンズはカルカッタ・アジア協会第三年次記念講演「インド人について」（1786年）の一節で、1）サンスクリットとギリシア語、ラテン語、その他の言語との類縁を「動詞の語根と文法の形式の双方において」確認し、2）それらに、「おそらく、もう存在しない、ある共通の源」を想定した⁵⁾（シュレーゲルはそれを、自説に引きよせて、サンスクリットとうけとっている）。1）の類縁性は古くから説かれていたことで、近くは、N. B. Halhed (1751-1830) が語彙の検討をもとに指摘したそうだから（1776年）、ジョーンズの独創ではない。したがって、問題は、ジョーンズの方法が比較文法のそれにつながるものか、いいかえれば、共通起源となる言語の想定は比較方法による再構にもとづくものか、ということになる。これは簡単な問いのようだが、じつのところ、ジョーンズは類縁についての所説をそれ以上発展させていないので、研究家は一節の文章のみを材料として論じざるをえず、おのずから、答えは左右に分かれる。筆者は、管見ながら、H. Hoenigswaldの論が歴史的な脈をよくとらえていると思う。すなわち、ジョーンズの方法を、直観的なものであれ、比較方法と見るのは当をえない。それは、比較文法はむろんのこと、シュレーゲルの比較方法とも世界を隔てているという意見で

ある。その理解の鋭さは、とりわけ、ジョーンズがサンスクリットについて “more perfect than the *Greek*, more copious than the *Latin*, and more exquisitely refined than either” と述べているのを、最初の言語は primitive であるという言語起源論の文脈の中に置いて、サンスクリットは、どれほど古いものであっても、起源に遠い、人手の加わった言語であると読むところに表れている。したがって、これは筆者の表現だが、その遠さをたどりかえす中で生まれたのが、「印欧語族」の共通起源説であった。

ジョーンズの一連の記念講演の主題は、アジアの五つの民族、インド人、アラビア人、タタール人、ペルシア人、中国人の言語と文化と歴史を研究し、それらの民族の起源と移動の歴史を構成することにあつた。このとき、ジョーンズの論理を導いているのは、まず、信仰であつて、学問は信仰といわば表裏一体となっている。それは第九年次記念講演「諸民族の起源と家族について」によく現れている。そこでは、「自然の作者」である神がすべての生物の一組の雌雄を創造したことを、エコノミー思想にもとづくリンネの文章をはじめに引用して（リンネについては後述）、説き、この最初の人間のペアが今日のすべての民族の祖先となったこと、ついで、『創世記』のノアの家系に依拠して⁶⁾、人種の三大区分であるインド人（ペルシア人、中国人、ヨーロッパ人、エジプト人、日本人、ペルー人を含む）、アラビア人（ユダヤ人を含む）、タタール人（スラブ人を含む）が大洪水のあと、故郷のイランの地からそれぞれ移動したこと、ノアの言語は早くに失われ（バベルの塔の伝説）、言語は民族の分散と混淆の過程であらたに形成されたこと、民族移動は紀元前1500年から1600年前にはじまったことを述べてゆく。したがって、「印欧祖語」はインド人の分散、移動とともに変化をとげて、現存の諸言語に至ったことになる。ジョーンズは聖書に由来する言語起源の一元説を明らかに信奉していたが、民族と言語の相即という考えかたがともかく有効なのは「印欧祖語」までであり、そこに限られている。しかも、言語には、元来、当然予想されるほど大きい役割があたえられていない。言語（と文字）は、哲学と宗教、彫刻と建築、学問と技術にならぶ、歴史研究の四つの手段の一つにすぎない。第一年次記念講演では、

「わたしはこれまで言語を真の学問の単なる手段と見なしてきたし、言語を学問そのものと混同するのは適切でないと考えている」と明快に述べていた。ジョーンズは、その人物と学識をもって、ヨーロッパのサンスクリット研究に大きくはずみをつけた人である。しかし、その仕事は言語そのものの研究ではなかった。

さて、シュレーゲルもまた世界の諸民族の起源と系譜に対する関心は深く、それをとりわけて「民族の歴史において一つの大きい家族を構成しているアジア人とヨーロッパ人」〔SWI. 315〕にむけた⁷⁾。これは後世に所謂アーリア民族の神話とのつながりを思わせないではないが、L. Poliakovによれば、シュレーゲルはユダヤ人の解放のために論陣をはった由であり、ゲルマン主義とはひとまず無縁であった⁸⁾。このドイツ・ロマンティックの主要な理論家が探しもとめていたのは、いまや危機に瀕しているヨーロッパの文化の本来の統一である⁹⁾。そして、たどりついたのは、おそらくヘルダーの歴史観に鼓舞されたことだろうが、「ヴィンケルマンのギリシア」の遙かな彼方に、香気をはなれて美しく揺曳する東洋の悠久の形姿であった¹⁰⁾。実際、シュレーゲルの場合、古代インドの言語、文学、哲学、宗教に対する関心はまさにロマンティックな enthusiasm に染めあげられ、おのずから、というのは、シュレーゲルはジョーンズと同じく言語と民族の相即を信じていたからだが、「印欧語族」についての所説もまた、一方で、経験的なデータの分析にたずさわって、サンスクリットとギリシア語、ラテン語、ペルシア語、ゲルマン語との類縁を確認し、さらにはアルメニア語、スラヴ語、ケルト語との類縁を想定しつつ、他方で、データ以前のロマンティックな偏向に染められることになる。そして、じつは、この偏向がシュレーゲルの著書の大きい影響力の源泉であって、その影響のもとに、比較文法が成立し、また以後の学説に一つの方向をあたえることにもなった。

シュレーゲルは著書の第一巻第一章「インドの言語全般について」の冒頭から、サンスクリットが上にあげた諸言語との類縁（同系）関係にあることを提示して、こう述べている。

類似は、サンスクリットがそれらと共有する非常に多数の語根にあるのみならず、もっとも内的な構造と文法にも及んでいる。この一致は、混淆によって説明のつくような偶然的なものではなくて、本質的なものであり、共通の起源を示している。比較によって、さらに、インドの言語がより古く、他のものはなお新しくて、前者に由来することが明らかになる。
[SWI. 115]

Aarsleff が指摘したように¹¹⁾、この文章はジョーンズの一節の引き写しに近いけれども、大きい相異は、シュレーゲルが、ちょうどラテン語がロマン諸語の共通の起源であるように [SWI. 149]、「印欧語族」の共通起源と考える点である。Timpanaro はこの点について、「シュレーゲルは誤って」と書いているけれども、この「誤り」にシュレーゲルの比較方法の独創がひそんで見ると見るべきである。もっとも、Timpanaro も指摘しているように、第五章「諸言語の起源について」では、言語起源の一元説を反駁した上で、「インド語は、あるいは、もしインド語が、より古くはあっても、なお他に由来した形態にすぎないなら、この家族にとっては祖語であり、共通の源であるのに、他のすべての言語にとってはそうではない、その言語はどのようにして生まれたのか」 [SWI. 167, 169] と述べているので、思考が揺れているように見えないではないが、これは、Koerner の指摘の通り、「譲歩」であって、せいぜい、サンスクリットに原サンスクリットとして Veda の言語（ヴェーダ語）を想定するにすぎず [SWI. 171, 173]、ちょうど、ロマン諸語の共通起源であるラテン語に、いわば原ラテン語をさらに想定するのに等しい話である。最終の第六章「類縁関係にある言語間の相異といくつかの注目すべき中間語について」では、サンスクリットが祖語であることをはじめに確認して、論をすすめてゆく。したがって、サンスクリットは、1) 「印欧語族」の諸言語よりもさらに古い言語であり、2) 「印欧語族」の共通起源であって、同時に、シュレーゲルは明確に多源説をとるので、3) 言語の起源に位置する最初の言語の一つであることになる。多源説をとれば、論理的に、サンスクリットが起源の言語の

一つになるかといえ、それはありえないから、論理外の価値の判断の介在を認めなければならない。シュレーゲルの独創は、この価値の導入にあった。さらにいえば、シュレーゲルは言語に二つの主要類型を見出し、経験と論理の及ばぬ領域で、その類型のうちの一つの「系譜」を過去にさかのぼらせて、言語起源論をたちあげた。そして、シュレーゲルの類型論は *vergleichende Grammatik*, 比較文法すなわち「文法の内的構造」の研究に有機的という概念をもちこむことによって成立する。そこで、この生物学的メタファーがどういう性質のものであるか、それが重要な問題になるわけだが、まず、次の文を引用しておきたい。第二章「語根の類似について」に続く、第三章「文法の構造について」のはじめの名高い一節である。

あの決定的な論点が、いますべてを解明するであろうが、それというのは諸言語の内的構造すなわち比較文法である。それは諸言語の系譜について、比較解剖学が高等な〔生物の〕博物学に対して光を投じたのと同じやり方で、まったく新しい説明をあたえるであろう。[SWI. 136]

ここで、すべてといわれるのは、とりあえず、上にあげた三点のうち最初の二点をさしている。そして、その新しい説明とは、次のごとくである（第三章）。

この言語〔サンスクリット〕の構造が有機的に形成されていることを認めなければならない。つまり、屈折、いかえれば、語根音 *Wurzellaute* が変化し、屈折することで、〔語の〕すべての意味が分かれてゆくのであって、ただ機械的に、語と小辞 *Partikeln* の付加によって組み立てられるのではない。こちらでは、語根自体はもともと変わらず、不毛のままである。[SWI. 149]

シュレーゲルは言語の類型に有機的言語（屈折語）と機械的言語（非屈折

語、ただし、著者はこのグループに名称をあたえていない)の二つを数える。前者に属するのは「印欧語族」であり、第四章「言語の内的構造による二つの主要類型について」から文体の特徴がよく出ている一節を引けば、

インド語あるいはギリシア語では、どの語根もまさに名の示すとおりのもの、生命ある芽のようなものである。つまり、関係概念が内的な変化によって表されるからこそ、発展に、より自由な余地が生まれて、生長は豊富で制約のないものとなりえ、事実、しばしば、すばらしく豊かである。
[SWI. 157, 159]

このような植物的比喩がいつも使われるわけでは当然なく、第三章のサンスクリットとペルシア語、ギリシア語、ラテン語の比較文法の記述では、具体的に、実詞の曲用、動詞の活用を、サンスクリットの「完成」からの逸脱をもあわせて、論じている。後者、非屈折語は「印欧語族」を除くすべての言語の寄せ集めであって、中国語のような「単音節」の言語で、「もっとも下位の段階に」[SWI. 157]あるものと、

屈折のかわりに接辞 Affixa しかもたず、語根はそもそも語根ではない。実り豊かな種子は一つもなく、原子が積み重なったようなものにすぎず、風がたまたま吹けば、たちまち散らされるか、寄せ集められるかである。関係といえば、外部からの添加による単に機械的な関係に他ならない。これらの言語には、起源のはじめから、生命ある発展の芽が欠けている。[SWI. 159]

ような、のちに膠着語と呼ばれることになる形態の言語とを含んでいる。言語の形態的分類のこのような二分法が、比較文法の隠れた背骨の位置を占めることになる、例の三分法の萌芽であることがわかる¹²⁾。

屈折語と非屈折語の区分から導かれる重要な論点は、言語の変化の方向が前

者と後者では逆になっているという主張である。前者では、文法構造のより古い形式がそなえていた有機性、いいかえれば、美と屈折の技法 Kunst は、時とともに失われてゆく。これは、すでに覚書（Ⅱ）に述べた、シュライヒャーの言語有機体の頽落説にも影響したように思われる、言語変化についての非常に特徴的な考えかたであって、すなわち、

芸術的にしつらえられた構造は、とくに粗野な時代には、日常の使用とともに磨滅し、徐々に、あるいはしばしば一気に失われる。そして、助動詞と前置詞をもちいる文法は、事実、もっとも短く、容易であり、世間一般のもっとも楽な使用のためのいわば省略法である。これは一般的な通則として立てることができるが、言語は、その構造が簡単になり、省略法をはぐくむにつれて、習得するのがいっそう楽になる。〔SWI. 143〕

しかし、一見、これに矛盾するようだが、後者の非屈折語では、「最初は技法なしであったものが、しだいに技法的になって、接辞が主要語と融合してゆく」〔SWI. 163〕ともされる。したがって、美と完成という価値の規準から見ると、有機的言語は頽落の傾向をもち、機械的言語は進歩の傾向をもつことになる。進歩とは、要するに、屈折の構造に接近する傾向であるから、両者の区分はいずれつかなくなるのかといえ、そんなことはありえず、後者が有機的になることはないとされる。この所説が、共時的な視点からは、説得力を欠くことはいまいうまでもないが、シュレーゲルにとって、有機的言語と機械的言語のあいだの断絶は本来的な要請である。

したがって、言語の起源は少なくとも一源的ではありえない。「言語と精神形成がどこでも同じようにはじまったというのは、恣意的で誤った仮定である。」〔SWI. 167〕あるいは、また、

われわれは言語の自然的な起源に異を唱えるつもりはまったくないけれどもただ、言語の起源が同一であるという説には反対する。それは、すべ

ての言語がはじめはひとしなみに野蛮で、粗野であったと主張されるからで、そのような主張は、これまでに多くの事実をあげて十分に論駁してきたものである。〔SWI. 169〕

自然的な起源をもつのは、機械的言語のほうである。自然的と形容される内容は次のように、十八世紀の言語起源論でしばしば採用された擬音語説あるいは間投詞説に等しく、自然の音の模倣と動物の叫び声に類した発声とに基礎をおいているので、これを人間的な起源をもつということもできる。

もう一組の言語の多数は、事実、意味をそなえた音節と多産な芽との有機的な形成物としてではなく、その大部分によれば、まさに、さまざまな音の模倣と音の遊び、単に感情的な呼び声、要するに、指示的な呼び、間投詞による指示の明確化から生まれたようである。それに習熟するにつれて、ますます多くの因習的な了解と恣意的な規則がさらに加わった。〔SWI. 171〕

有機的言語は、上のような人間的な起源とはまったく異なった起源をもつ。次の引用文は第五章の起源論のさわりというべき文章で、はじめにサンスクリットをとりあげて、言語の一つの起源の一般的な説明としている。自覚 *Besonnenheit* をはじめとして、意識、感覚、理性という言葉が使用されていることに注意したい。

この言語はただ身体的な呼び声ではなく、音のさまざまな模倣でもなく、つまり、音声で遊んでいるうちに、しかるべき理性と理性的な形式とが形成されたというような言語実験ではない。その言語は次のことのもう一つの証明になっている。〔中略〕人間の状態はどこにあっても動物的な愚鈍さからはじまり、長く骨の折れる苦勞をして、ようやく、理性がいくらかそこここに生まれてきたというのではない。それが示しているのは、

どこでもというわけではないにせよ、われわれの研究がたちもどっている、まさにその場所では、当の最初からもっとも明晰で緊密な自覚が働いていたことである。というのは、この言語は、そのような自覚が生み出した成果であって、それ自身、最初のもっとも簡単な構成要素においても、純粋な思考世界の最高の概念を、いわば意識の全見取り図を、比喩を通さず、より直接的な明晰さのうちに表現しているからである。

さて、人間が自己の起源においていかにして、この称賛に値する贈り物を手にするに至ったか、また、それが徐々にではなく、一気に起こったのなら人間の自然的な能力と呼ばれるものだけにもとづいて、解明されることが出来るか、どうか、それについては、続く第二巻でふれて、より広い考えかたのきっかけとしたい。そこでは、歴史的研究が届くかぎりでもっとも古いと見なされる思考方式をくわしく説明して、さらに古い、最初のもの明瞭な痕跡がそこにひょっとして示されていないか、どうか、よく検討することにする。しかし、言語については、それを完全に自然的な方法とは異なった方法で解明しようとするのはまったく不必要なことである。言語にあっては、少なくとも、前提として他に助けをもとめることにはおよそ何の根拠もないからである。〔中略。上に引用した SWI. 169 の文章がここに入る〕

人間がいかにして、そのような自覚に達したか、それはまた別の問いである。自覚とあいまって、つまり、われわれがすでに理解しているような深い感情と精神の明晰さとあいまって、言語が生み出される。しかも、いま話題になっている言語と同じほど美しく、芸術的にしつらえられた言語が。事物の自然的な意義に向けられた、澄んだ視線とあいまって、また、人が音声器官のおかげで産出する、すべての音声の最初の表出に対する繊細な感情とあいまって、繊細に形成された感覚がもたらされた。それが文字〔音声〕を分離し、一つにまとめて、意味をそなえた音節を、言語のあの本来神秘的で不可思議な部分〔語根〕を発明し、発見し、確定し、語形変化を生んで、いまや内的な力によって大きく生長し自己を形成してゆ

く、一つの生命ある組織へと変化させた。こうして、この美しい、無限に発展する能力をそなえた、精巧かつ単純な形成物、すなわち、言語が生まれた。そこでは、語根と構造つまり文法、両者はすべて同時に一体化した。というのは、両者は同じ一つの深い感情と明晰な感覚の結果であるから。[SWI. 169, 171]

Timpanaro (1973, xxii-xxiii) は、とくにこの箇所を論拠にしてというのではないが、シュレーゲルの説を有機的言語の神授説であるとする。確かに、引用文の第二節のはじめが神的な起源の暗示であることはまちがいない。しかし、そこに見られるように、神授説は積極的に説かれているというより、むしろ隠蔽されているように思われる。ということは、結局、有機的言語は神の所産であることになるけれども、暗示にとどめていることもまた事実である¹³⁾。筆者が考えるに、それは、シュレーゲルがヘルダーの『言語起源論』(1770年)に依拠し、同時に、それをひそかに相手どっていることに由来している¹⁴⁾。周知のように、ヘルダーは、1) 人為説、言語の起源が人間的であることを主張する。そのとき、もっとも重要な問題になるのは人間と動物の区分であり、区分の指標となったのは人間の魂 Seele のありかたである。それは動物的本能と対置されて、自覚 Besonnenheit と呼ばれる。自覚は人間の魂の本質に属する生得的な能力であり、意識、感覚、理性を統一する、精神の機能のいわば源泉といってよい。「人間がみずからに固有の自覚という状態におかれ、この自覚(内省)がはじめて自由に働いたとき、人間は言語を発明した」(括弧内、著者)、したがって、「言語の発明は人間にとって、みずからが人間であるのと同じくらい自然的なことである。」ヘルダーはそこから出発して、一方では、ジュッスミルヒの神授説と、他方では、コンディヤックが先鞭をつけた啓蒙思想の人為説との批判をこもごも展開してゆく。次に、ヘルダーの考えかたの基本となっているのは、2) 言語は漸進的に発達する、というものである。すなわち、言語は起源のはじめから完成した語彙と文法をそなえているわけではない。たとえば、名詞は動詞から形成されるので、原初的な範疇ではありえな

い。また、名詞が起源的に存在するとしても、自然言語が、文頭に名詞をおくという純論理的な構成を守っているとは限らないという事実は、神授説に対する反証の一つとされる。言語は当初の未熟と不規則から漸進的に発展してゆくが、それは理性の進歩と歩を一にしているからである。というより、言語と理性は表裏一体のものである。ここで注意しなければならないのは、3) 起源の言語、「魂の言葉」が自然の音の模倣あるいは感情的な呼び声とは必ずしも同じものとされず、一定の留保を付されていることである。その点では、コンデイヤック流の人為説に等しい、シュレーゲルの機械的言語の起源説はヘルダーの所説とぴったり一致してはいない。こうして、ヘルダーの言語の人間の起源の説は独自の位置を獲得することになる。しかし、4) それは造物主としての神を否定するものではまったくなく、かえって、神をもっとも明るい光の中に示すものであるとされる。「神の業である人間の魂は一つの言語をみずから作りだし、引き続き作ってゆく。魂は神の業であり、人間の魂であるがゆえに。魂は創造者として、神の本質の似姿として、理性の感覚をみずから打ち立てる。それゆえ、言語の起源は、それが人間的である限りにおいて、あくまで荘厳に神的である。」これは、ヘルダーにすれば、論理を貫徹させたつもりであろうが、神授説の論者からすれば、換骨奪胎であって、それだけに、一種の安心をもたらすものであったにちがいない。

シュレーゲルは、上の引用文の後半に明らかなように、言語つまりサンスクリットの起源あるいは発明については、古代インドの「思考世界」をあつかう方法とは一線を描いて、あくまで自然的な説明のしかたをとろうとする。それはヘルダーの方法にひとまず立ちもどることに他ならない。シュレーゲルの言語起源論が人間的な自覚を基礎として展開されるのは、そのことの一つの証明である。しかし、それには、含みがある。それは、つきつめれば、信仰に行き着くことかもしれないが、明確な論理が働いていたことを見落とすべきではない。すなわち、有機的言語とその「祖語」であるサンスクリットの構造を把握するための論理である。シュレーゲルは、サンスクリットもまた、Vedaの言語からは頽落している（南インドの住民の非屈折語との混淆によって）と考

えていたようだが、その事態を含めて、サンスクリットの規則的に完成した、美しい文法構造は起源の言語の性質に直接に由来していると見なした。有機的言語とは、有機的な構造をそもそものはじめから完全にそなえた言語である。では、この完全な言語はどのようにして生まれたのか。それは、ダンテが歌ったアダム、あの「生まれたことのない男」の場合に同じく、神意の働きであろうか。シュレーゲルは、なるほど、問いを提出しただけであって、明快に答えてはいない。起源において完全な言語が、どうして人間的なものといえるだろうか、そう問いかけるのみである。しかし、答えは、含みとして暗示された。シュレーゲルは、ここで、ヘルダーが自然言語の秩序と美は神授説の論拠たりえないとするのにならなくも抵抗して、同じ論拠に立ちつつ、神的な起源を暗示している。筆者の考えでは、そう読むのがやはり正しい解釈である。シュレーゲルの隠蔽は言語の議論において経験と論理を超越することに対する逡巡に由来するだろう。ひとまずそう考えてよい。しかし、より強力な理由が信仰のほうからやって来たことを考えあわせておく必要があるだろう。聖書に依拠する正統的信仰は、神の啓示がインドの民に言語を授けたことを、伝統的なヘブライ語問題はしばらくおくとしても、神学的、歴史的事実として、果して、認めるものであろうか¹⁵⁾。そのような内面的な問題が、シュレーゲルが1808年、本書の出版と同年にカトリックに改宗したことと無関係であるとは、やはり、考えられない。そこで、以上をまとめるなら、1) サンスクリットおよび「印欧語族」に属する諸言語は神的な起源に由来するのに対して、2) その他の言語（機械的言語）は自然的な、すなわち人間的な起源に由来し、3) 言語の起源は一つの神的起源と二つ以上の人間的起源とをあわせて、三つ以上あると考えられる、というのは、シュレーゲルは機械的言語に一つの共通起源を認めないから、という結論になる。

こうして、シュレーゲルの「比較文法」はサンスクリットとその「家族」に、鮮やかな価値に染めあげられた「系譜」をあたえることに成功した。その言語有機体説は、諸言語のデータを広く、たとえばアレクサンダー・フォン・フンボルトが収集した中央および南アメリカ・インディアン諸語のデータを含

めて、検討しているけれども、隠蔽された結論については少なくとも、比較方法という言葉の組み合わせから予想されるものとはまったく異なった結果に達しているといわなければならない。

さて、ここで、あらためて考えてみるに、有機的というメタファーは単なるラベルなのか、それとも一定の実質をそなえているのか。どちらだろうか。さきの引用文に見えていたように、シュレーゲルは種子、芽、幹、生長、不毛といった植物のメタファーをよくもちいているが、元来、言語研究の用語が生物学的メタファーを豊かにもっていたことも事実であって、代表的な例は、語根¹⁶⁾。これは十七世紀にヘブライ語文法の *shoresh* を借用した用語の由で、*Wurzel* という語がシュレーゲルの一連のメタファーを生み出している。しかし、有機的は、明らかに、この例には加わらない。そして、シュレーゲルがロマンティックの作家、批評家であったことを思えば、有機的というメタファーがラベルではありえないという予想はすぐ頭に浮かぶ。事実、カッシーラーは『象徴形式の哲学』第一巻『言語』（1923年）で、シュレーゲルの著書が言語の考察に導入した有機的形式という新しい概念にふれて、それを、ロマンティックの思弁の目標と統一点を示す普遍的な原理ととらえ、有機体という中心的な課題からゲーテの植物変態論、カントの批判哲学、シュリングの自然哲学、さらにはフンボルトの言語哲学を見据えるという洞察にとむ研究をいち早くおこなっていた。これらからフンボルトを除き、ヘルダー、フィヒテを加えれば、シュレーゲルの言語についての思索をあるいは方向づけ、あるいは加速した同時代の人々の主な名をあげたことになるだろうし、シュレーゲルの自然哲学が、神の創造にかかる自然の生命の力を論じた、晩年の『生命の哲学』（1828年）にいたるまで「樹木というロマンティックのパラダイム」を維持しているという指摘もある¹⁷⁾。一々の追尋はもとより筆者のよくなしうるところではないが、ロマンティックの思潮の背後に、自然界の再編成というパラダイムの大きな転換があったことは確実である。自然界はもはや伝統的な三分区ではなく、有機界と無機界という二つのカテゴリーに再区分される。有機体（生物）と無機物（無生物）は、当然、非連続的で、系列は切断されるから、所謂存在

の連鎖は少なくとも一箇所では断ち切られることになる。生物学、つまり生命 bios の学という言葉はブルダッハ（1800年）、トレヴィラヌス（1802年）、ラマルク（1802年）がそれぞれ独立にもちいはじめたが、それは、有機界と無機界という自然界の再統合が化学と生理学的研究の進展とあいまって、共通の文脈になっていたがゆえに、おこりえたことである¹⁸⁾。では、有機体がロマンティックのパラダイムであるとして、シュレーゲルの言語有機体説はこのパラダイムの中に生まれ、育ち、ついに、そこに消え去る性質のものであろうか。たとえそうであるとしても、それは、言語研究と自然哲学、自然諸学の綿密な検討によって隠れた関係を見出す作業を終えたのちにはじめていえることだろう。そこで、もっとも問題となることの一つは、シュレーゲルが提起していた、比較文法と比較解剖学の対置の解釈である。

この比較解剖学が、なんらかの意味で、キュヴィエの『比較解剖学講義』に関係することはこれまでしばしば注意されてきた。たとえば、Koerner (1989, 276) は、シュレーゲルが1802年の秋以降にパリでキュヴィエに推薦状を書いてもらっていること、その未刊のノートでキュヴィエの化石についての著作に言及していることなどもあわせて指摘している。しかし、まことに管見ではあるが、どういう意味で関係するのか、その内容をくわしく説いた論はまだないようである¹⁹⁾。『講義』は五巻本で、C. Duméril 編の一卷（運動器官論）、二巻（感覚器官論）が1800年に、G. L. Duvernoy 編の三巻（消化器官論）、四巻（消化、分泌、循環、呼吸器官論）、五巻（生殖、排泄器官論）は1805年、シュレーゲルがケルンに一時移った翌年に出版された。哺乳類から植虫類に至る動物の体系を、比較解剖学の見地から、器官系を縦の軸にとって記述した、この浩瀚な書物を、シュレーゲルがもし読んだとすれば、興味をもっともそそられたのは第一講の動物学の総論、「動物のエコノミーについての予備的考察」であったと考えてまちがいない。

oeconomia は、ギリシア哲学に発して、以後、古典医学、教父哲学、神学、また錬金術の思想体系、近代科学（医学、生理学、人口論）をへて、ダーウィンの『種の起源』にうけつがれる言葉で、豊富なニュアンスのゆえに、訳語を

つけにくいだが、大要、自然が保っている、目的にかない、収支のとれた均衡の理法をいう。この概念を *oeconomia naturae* として大成したのは、スウェーデンの分類学者リンネの『自然のエコノミーについての学的証拠』（1749年）である。リンネはエコノミーを定義して、「自然の事物が共通の目的に役立って、相互の利益を生むべく従っている、至高の創始者によるもっとも賢明な配置」と述べている²⁰⁾。神の創造の業は自然の秩序の計画を前提とする。いかえれば、鉱物を含む、地球上のすべての種は繁殖、配分（地理的分布）、自己保存、そして、破壊（死）の四つの現象を通して相互に関係しつつ、全体の調和のとれた発展を永続的にこなすという使命を授けられていることになる。それは、もとはといえば、機械論的哲学の隆盛のさなか、十七世紀末葉のイギリスに興った自然神学の新たな流れをくむ思想である。分類学史を十八世紀半ばまでたどってみれば、動植物の自然分類がとくにプロテスタンティズムの文化圏で発展したことがはっきりわかる。自然神学もまたそうであったのは、プロテスタンティズムが聖書の字義の解釈を信仰の一つの証として要求したからである。その意味で、リンネが敬意と敵意の双方を隠さなかった、イギリスの分類学者ジョン・レイの『創造の業に表された神の叡智』（1691年）が第一部の冒頭で、「主よ、なんぢの事跡はいかに多なる、これらハ皆なんぢの智慧にてつくりたまへり」という『詩篇』第百四篇の詩句をまず引用して、解釈を加えてゆくのは印象深い²¹⁾。レイは、生物の環境への適応の現象に注意をむけたといわれる。それはエコノミーの遡行的解釈にすぎないが、また、エコノミーの観念がキリスト教神学のみならず、アリストテレスの目的論に淵源することを示している。キュヴィエは青年時代に *oeconomia naturae* の思想に加えて『動物部分論』に傾倒しているが²²⁾、その生物学的思考の形成には、さらに、機能主義と形式主義の対立の渦中にあった医学がかかわっていた。B. Balan はキュヴィエを論じて、ドイツの G. E. Stahl (1660-1734) に至るエコノミーの観念と医学、生理学の関係の歴史を詳細に扱っている²³⁾。シュタールは、周知のように、機械論をしりぞけて、アニミズムを唱え、生氣論の口火をきった人である。生命の座としての有機体（人体）は機械から峻別されて、アニマという

目的論的な運動原理を付与される。キュヴィエは生命現象の考察にあたって、後年まで生氣論にくみすることはなく、自然学（化学，物理学，数学）の一般的法則の適用をあくまで尊重したが，有機体の全体としての把握，すなわち，全体と部分の連関という考えかたを自己のものとしたのは，機能主義の生理学と解剖学によってであった。有機体の統一という，この目的論的な布置を人体に限らず，動物界の全領域に拡大するとき，*oeconomia animalis* と呼ばれる視点が生まれ，「生存の諸条件」に由来する動物の体制の比較研究という，解剖学と博物学（分類学）の再編成の道が開拓される。比較解剖学を成立させた根本の考えは，神の創造にかかる，生存の諸条件であった。しかし，キュヴィエが神をもちだすことはあまりない。Nordenskiöld は，ラマルクよりも頻度が低いと述べている²⁴⁾。いま『動物界』（1817年）の「序文」から引いておくと，「自然の調和は神意 Providence により反駁の余地なく主宰されている²⁵⁾。」ちなみに，キュヴィエはプロテスタントであった。

さて，動物のエコノミーを説く第一講の第一項「動物が行使する諸機能の概観」は，予想に反してというべきか，当然そうあるべしというべきか，生命の観念の現象としての把握を強調することからはじまっている。

生命という観念は，いくつもの一連の現象が安定した秩序の中に継起し，相互の関係によって維持されているのを目にするとき，われわれのうちに生まれる，あの一般的で茫漠とした観念の一つである。われわれはそれらの現象を統一している絆の性質を知らないとはいえ，絆が実在するにちがいないと感じているし，そう感じているからには，それらの現象を一つの名で指示してよい。すると，世の人はすぐその名をある特別な原理の徴と見なしがちであるが，事實は，この名が示すのはあくまで現象の総和であって，現象が名を作りだしたにすぎない。〔LAC. 1〕

生命あるいは生命力は，物体を支配している一般的法則に対する例外，少なくとも見かけの上は，である。というのは，生命は，有機体を構成している分

子を分解しようとする化学親和力に抗して、分子の統合と新旧の分子の交替を持続し、一定の期間、全体の運動を維持しているが、死はたちまち生物を物体と化するからである。全体が維持されるのは、部分が固有の運動をせずに、一つにまとまって、全般的な運動に参加することによってである。そこで、「カントの表現によれば」といって、キュヴィエはこう述べている。「ある生体の各部分がかくある、その理由は全体の中に存するのに対して、物体では、各部分がそれぞれ理由をもっている。」〔LAC.6〕これはカントの『判断力批判』（1790年）第二部第一篇の「物は自然目的として、有機化された存在者である」（§65）と「有機化された存在者における内的な合目的性の判定原理について」（§66）の所説の部分的なパラフレーズである²⁶⁾。これらの表題に示されているように、そこでは、有機体は機械的な因果作用による自然の所産でありながら、同時に、目的論的に把握された、有機化され、有機化する所産であって、このとき、有機化とは、部分が他の部分によってのみあり、他の部分と全体のためにある（内的合目的性）という事態の成立を意味する。そして、そこから、自然の全体にかかわる外的な合目的性が想定されることになる。カントのそのような所説はキュヴィエの目的論にひとまず等しい。しかし、批判哲学者は、まさに自然神学とエコノミーの思想に他ならない外的合目的性の想定に反省的判断力の介入を認めて、外的合目的性は自然学を拡大するための一つの手引にすぎないと見なした。Coleman は、キュヴィエが批判哲学に多くを負うことを別の文脈で認めているが、その上で、この、あたかも合目的的であるかのように、の哲学は比較解剖学者に何の影響もあたえなかったと書いている²⁷⁾。キュヴィエは醇乎たるアリストテリアンであったというわけだ。当人はかような形式的議論にさして関心をもたなかったらしく、第一講にもこれ以上の展開はないが、批判哲学との関係はさらに解明すべき問題である²⁸⁾。ともあれ、シュレーゲルがキュヴィエを読むにあたって、カントの素地がものをいったことは明らかであろう。

次の引用は、キュヴィエの有機体の説明である。それはエコノミー思想の伝統にそうもので、リンネの繁殖、自己保存、破壊の三つのカテゴリーに対応し

ているが、後者のように、それらを鉱物にも適用することは、当然ながら、ありえない。

生殖による起源，栄養摂取による生長，現実の死による終末，かくのごときがすべての有機体に一般的であり，共通する特徴である。しかし，有機体のうちには，上の機能および，それに付随する機能をしか働かさず，それらを働かせる器官しかもたないものがある一方で，特殊な機能を働かせるので，それに適合した器官を必要とするのみならず，必然的に，一般的な機能の働きかたと，それに適した器官とを変化させるものもある。

[LAC. 10]

こうして，動物と植物の区分が立てられるが，それにふれる必要はないだろう。もとへもどって，物体についての文章を引用する。

なまの固体は，多面体の分子が面でお互いを引きあっている，その分子でしか構成されておらず，引き離すと，ただちに分離する。人が手段をつくしても，非常に制限された数の要素物質にしか分解されない。要素物質の結合と分子の凝集によってしか形成されない。新しい分子の並置によってしか生長せず，新しい分子はもともとある分子の塊を包みこむ。そして，なんらかの機械的な作用因がその部分を分離するときには，あるいは，なんらかの化学的な作用因が部分の結合を損なうときには，破壊されない。[LAC. 9-10]

さて，以上の所説のうち，とくに有機体と物体についての引用文をシュレーゲルの有機的言語と機械的言語についての引用文と比較してみると，双方はよく似ていることがわかる。シュレーゲルの有機的，機械的という概念の対置は『比較解剖学講義』に由来するものではないだろうか。まず，1) 有機体と有機的言語については，両者はともに有機化された事態にあるわけだから，表

現が似てくるのは当たり前といえ、当たりのことにすぎないが、シュレーゲルが有機的言語に認めた、あの頽落の傾向は比較解剖学に保証をあたえられて、ようやく存在したように思われる。なぜなら、「比較文法は言語の系譜について、比較解剖学が高等な〔生物の〕博物学に対して光を投じたのと同じやり方で、まったく新しい説明をあたえるであろう」〔SWI. 136〕といわれる「系譜」は、「生命は生命からしか生まれぬ」〔LAC. 7〕という意味での血統の連続でしかないからである。そこには、primitive な生命の形態がしだいに複雑な構造を獲得して、高度な機能をそなえるにいたるといふ、進化論的なメタファーの成立する余地はまったく残されていない。Koerner がラマルクの『無背椎動物体系』（1801年）をもちだしているのは、その意味では、まったく見当外れである²⁹⁾。有機的言語の特殊創造説は、自明のことながら、言語の変化を種の変化として把握することを許さない。ひるがえっていえば、「印欧語族」が一つの種であって、サンスクリットはその祖先であり、ギリシア語、ラテン語、等々は子孫である。それらがあたかも異なった種であるかのように見えるとしても、リンネ以来の分類体系にいう変種であるにすぎない。なんなら、雑種といってもよいし、混血児といってもよい。そして、その「種」の起源が神的であることをあらためて思いおこせば、有機体説は戦略的メタファーであって、サンスクリットと「印欧語族」の神的起源を隠蔽するために巧妙に選択されたものであるという解釈上の事実が浮かびあがってくる。それは、というのは、言語に冠するに有機的という語が選択されたのは、当時の知識人たちの耳にいかにも通りやすいからであった。シュレーゲルの「比較解剖学」はほとんど修辞の意匠にすぎない。そのことは、有機的に対置される機械的という語のありかたを考えてみれば、いっそうはっきりする。すなわち、2) 物体と機械的言語について、シュレーゲルとキュヴィエの引用文を読みくらべると、原子と分子、離散、集合と分離、凝集、添加と並置、機械的な関係と機械的な作用因のように、語句の一層の類似が眼につくことは争われない。シュレーゲルが書き写したというのではなく、機械的言語という着想がキュヴィエの物体の定義に発しているということが重要である。そして、その着想は有機的

言語という、より意味深い着想にともなって思いつかれたものにすぎず、元来は、二次的な意味をしかそなえていなかったはずである。一方は、有機体、でおさえるから、他方は、物体、でくくればよいというようなところか。比較解剖学が有機体と物体を区分するのは、生理学という科学の一部門として客観性の規準をみたすことがらであって、戦略にはかかわらない。しかし、言語研究がそのような区分を研究対象に措定すれば、大きい矛盾をみずからかかえこむことになるのは当然である。シュレーゲルは、統一的な視点が、神的起源の言語と自然的起源の言語をそれぞれ「言語の二つの主要類型」に配置することで、確保されると考えたにちがいない。有機的、機械的というメタファーが誇張されたパラダイムの渦に巻きこまれて、とどのつまりは、波間に消え去ることになるとは考えなかったにちがいない。しかし、論理の矛盾はおおいがたい。一方は生物であり、他方は無生物である二つの存在のあいだに、サンスクリットについてすでにふれたような言語の混淆、つまり雑種の形成がどうしておこるものだろうか。さらに、注意しておきたいが、キュヴィエの「型による分類」と誤って伝えられる、例の四門からなる動物分類がシュレーゲルの言語類型論に影響をおよぼしたとうけとる人があるようだが、それは1812年の論文にはじめて発表され、『動物界』で記述されたもので、『比較解剖学講義』はラマルクの『動物哲学』（1809年）の分類と同じ形式の階層的分類にいまだどまっている（分類の意図するところは正反対だが）³⁰⁾。キュヴィエの分類方法の二つの原理、形質従属の原理と形質連関の原理について、後者は言語の再構と無縁ではないけれども、いまふれるにはおよばない。言語の類型論と比較解剖学の動物分類とのあいだに、特殊な結びつきが認められないからである。しかし、シュレーゲルが比較解剖学をいうとき、もっとも一般的な意味で、比較（内的であれ外的であれ）の原理に立った分類という考えかたが頭にあったことはやはり認めなければならない。言語類型論をとにかくも生み出したのは、その考えかたである。シュレーゲルの比較文法とキュヴィエの比較解剖学の比較から導かれる結論は、以上のごとくである。

シュレーゲルは、比較文法という方法の大まかな骨格を実践によって明らか

に示した人であり、また、ヤコブソンが1957年に言語類型学の重要性を説いて以来、類型学の書に先駆者として名の出る人である³¹⁾。この評価が揺らぐことはないだろう。そして、すでに述べたごとく、価値の判断の導入がシュレーゲルの独創の内実であったことも、同時にまた。

(juillet-septembre 2001)

略号 (Ⅲ)

SWI. : Schlegel, Fr., *Über die Sprache und Weisheit der Indier*, in *Studien zur Philosophie und Theologie*, Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe, Bd.8, München, Schöningh/Zürich, Thomas, 1975, SS.105-317.

LAC. : Cuvier, G., *Leçons d'Anatomie comparée*, T.I, Paris, Baudoïn, 1805 (Repr., 1969).

註

- 1) Locke, J., *An Essay concerning Human Understanding*, edited by P. H. Nodditch, Oxford, Clarendon Press, 1979, p. 405. 自明のことながら、ここにいう signs はソスュールの言語記号とは異なる。Kretzmann は、ロックの proliferating terminology を指摘しつつ、words をひとまず分節音に等しいとするが、その意味作用は、分節音が抽象観念 certain abstract [simple or complex] ideas と連結することに他ならないとする。Kretzmann, N., *Locke's Semantic Theory*, in Parret, H. (ed.), *History of Linguistic Thought and Contemporary Linguistics*, Berlin, de Gruyter, 1976, pp. 331—347. したがって、ロックが語と観念の恣意的な関係の説明に言語の多様性をもちだしているのは、ソスュールの有名な bœuf/Ochs の例証の場合とちがって、なんら矛盾をきたすものではない。Cf. Harris, R., *Saussure and his Interpreters*, Edinburgh UP., 2001, pp. 99—101.
- 2) Aarsleff, H., Bréal vs. Schleicher: Reorientation in Linguistics during the Latter Half of the Nineteenth Century, in Aarsleff, *From Locke to Saussure—Essays on the Study of Language and Intellectual History*, Minneapolis, Univ. of Minnesota Press, 1982, pp. 293—334.
- 3) その経緯の簡明な記述として, Morpurgo Davies, A., *Nineteenth-Century Lin-*

guistics, London, Longman, 1998, pp. xv—xvi, 13—20.

- 4) Bopp, Fr., *Grammaire comparée des Langues Indo-Européennes*, traduite sur la deuxième édition et précédée d'une introduction par M. Bréal, T. I, Paris, Imprimerie royale, 1866, p. xii [略号 GL. I.].
- 5) 一連の記念講演は, *The Works of Sir William Jones*, Vol. III, London, Stockdale, 1807 に収録。次の引用文は, p. 34. ジョーンズの方法を高く評価する論は, Aarsleff H., *The Study of Language in England, 1780—1860*, Princeton UP., 1967, pp. 115—161. 一般にシュレーゲルの貢献とされる, 1. 語源学の作為に対する警告, 2. 語の構造の強調, 3. 諸言語の歴史的・比較的研究の主張のいずれについても, ジョーンズにプライオリティを認めている。この人の論は他に, *The eighteenth Century, including Leibniz*, in Th. A. Sebeok, *Current Trends in Linguistics*, Hague, Mouton, 1975, pp. 434—436. Aarsleff, *Op. cit.*, 1982, pp. 314—316. また, 田中利光「ウィリアム・ジョーンズと印欧語族の認識」, 『言語研究』, 93号, 1988, pp. 61—79 は, 言語と民族の相即というジョーンズの作業仮説を軸にして, 再構の問題を肯定的に論じている。本文中の H. M. Hoenigswald の論文は, *On the History of the Comparative Method*, *Anthropological Linguistics*, vol. 5—1, 1963, pp. 1—11. なお, Hoenigswald とは趣を異にするが, R. Harris は記念講演の復刻版に付した序文で, ジョーンズをどんな言語研究の開拓者とも認めないで, 「印欧語族」をめぐる例の文章の目的について, 「インド文明の研究を, ヨーロッパ文明との親族関係を主張することによって正当化する」ためのものだと述べている。Jones, W., *Discourses delivered at the Asiatick Society 1785—1792*, with a new Introduction by R. Harris, Routledge/Thoemmes, 1993, pp. v—xi. ジョーンズについては, 進歩的な政治意識を含めて, なお, Cf. Robins, R.H., *The Life and Works of Sir William Jones*, *Transactions of the Philological Society*, 1987, pp. 3—23.
- 6) ジョーンズがノアの長男セムにアラビア人, 次男ハムにインド人, 三男ヤペテにタタール人の祖先をあてるのは (Jones, *Op. cit.*, pp. 194—195), 聖書解釈の伝統を破っているが, 詳細は未調査。ボスユエの『世界史論』(1681)には, 「ヤペテ Japhet は西洋の大部分の地域に植民し, その地では Iapet という名で有名であった。ハムはエジプト人とフェニキア人のあいだで同じく知られていた。そして, セムの記憶はそれに由来するヘブライ人の中にいまも続いている」とある。Bossuet, *Discours sur l'Histoire universelle*, 4 éd., Paris, David, 1707, p. 11. Iapetos は Kronos と Gaia の子。ギリシアの神話との習合は古く五世紀のアルメニアの歴史家 Moses Khorenats'i にさかのぼるらしい。シュレーゲルは『世界史講義』(1805—06, ケルン)で, かれがヴォルテールの『歴史哲学』以後の人であることに注意したいが, 旧約聖書の寓喩的解釈に立って, ヤペテを全ヨーロッパ人と見る。ただ

し、ノアの子を四人とし、ハムをアフリカ人、セムをアジア人、ゴメルをキンベル人にあてる。Schlegel, *Vorlesungen über Universalgeschichte (1805—1806)*, Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe, Bd. 14, München, Schöningh/Zürich, Thomas, 1960, pp. 10—11. かく、一般に、ヤペテがヨーロッパ人の祖先であり、十八世紀には、Japhetic は「印欧語族」をさす用語であった。なお、「印欧語族」の発祥をスキチア人にもとめる、所謂 Scythian theory については、Cf. Droixhe, D., Avant-Propos, in *Histoire Epistémologie Langage*, vol. 6—II, Univ. de Lille, 1984, pp. 5—16. Morpurgo Davis, *Op. cit.*, pp. 46—47.

- 7) シュレーゲルは第三巻「歴史上の考え」第二章「諸民族の最古の移動について」で、中央アジアを人類の故地とする歴史家たちの説を採用し、この地を「母であり、諸民族がそこから移動をはじめ、涸れることなき源である」[SWI. 269]と見なしている。それはエデンの園の所在地をめぐる従来の議論に対する関心と、民族の移動、混淆による新しい民族の誕生という歴史的研究とがないまざった上での立論であり、結論である。
- 8) Poliakov, L., *Le Mythe aryen*, Paris, Calmann-Lévy, 1971, pp. 191—193. なお、兄の August Wilhelm Schlegel (1767—1845) は1804年、ナポレオン戦争前夜の民族主義の高揚のさなかに、「人類の再生がはじまる場所が東洋であるなら、ドイツはヨーロッパの東洋と見なさるべきである」と書いている。Gérard, R., *L'Orient et la pensée romantique allemande*, Paris, Didier, 1963, p. 132. それは、東洋の言語の研究が、反啓蒙主義ないしは反動的イデオロギーと微妙に結びあって展開するロマンティックの運動の渦中にあったことを示している。
- 9) シュレーゲルの書の第三巻の最終第五章「東洋とインドの研究全般、その価値と目的について」の末尾の一節の文章は、本書の総括と見てよいもので、しばしば引用されるが、著者の執筆の姿勢と意図をよく伝えている。すなわち、「われわれはこれまでの世紀ギリシア人に、あまりに片寄った安易な傾倒を示してきたせいで、古代の真率と一層高い真理の源泉とにひどく疎遠になっているとしても、東洋の古代のまったく新しい知識とその観照は、われわれがそこにより深く沈潜すればするほど、ますます、神的なるものの洞察と、あの、あらゆる芸術とあらゆる学識にはじめて光と生命をあたえる志操の力とにふたたびつれもどしてくれるであろう。」[SWI. 317]
- 10) インドを人類の揺籃の地とするヘルダーの東洋観については、Aarsleff, *Op. cit.*, 1967, pp. 153—154. また、Leslie Willson, A., Herder and India: The genesis of a mythical image, *PMLA*, LXX—5, 1955, pp. 1049—1058.

シュレーゲルは1802年東洋の研究を目的の一つとして妻のドロテアとともにパリに赴き、1804年まで滞在した。この間、ドイツの哲学とロマンティック文学の紹介につとめつつ、ポルトガル、スペイン、プロヴァンサル、ペルシア、インドの言

語と文学の研究につとめたが、心中深くつねに、生命統一体としてのヨーロッパという宗教的ヴィジョンが潜んでいた。1808年妻とともにカトリックに改宗するのも、そのゆえである。サンスクリットへの関心は元来、ヘルダーとゲーテの称賛をかちえた、ジョーンズの *Sacotala* の翻訳 (1789) の独訳 (1791) の大きい影響によるが、このころには、「一切は、そう、例外なく一切がインドに由来する」(Tieck 宛, 1803年の書簡) とするまでになっていた。ブレアルによれば、パリは当時東洋研究の中心で、サンスクリット研究についても、A. Hamilton (1762—1824) を中心に、L. M. Langlès (1763—1824), A.-L. de Chézy (1773—1832) らのグループがあった [GL. I. xii]。Hamilton はスコットランド人、1783年にベンガル駐留軍士官候補生としてインドに渡り、サンスクリットを学び、Asiatic Society 会員、1797年帰国、パリ国立図書館所蔵のサンスクリット写本の目録作成に当たっていた。当時のヨーロッパ大陸でサンスクリットの知識をもつただ一人の人物であったと言われ、帰英後 Hertford の Haylebury College で、ヨーロッパで最初のサンスクリットの教授職につき (1806)、ロンドン時代のポップとも交渉があった。Chézy は Silvestre de Sacy (1758—1838) にアラビア語を、Langlès にペルシア語を学び、東洋語学校ペルシア語教授、コレージュ・ド・フランスの初代サンスクリット教授となる (1814)。シュレーゲルはこのグループに迎えられ、Hamilton を自邸に同居させて、サンスクリットを学び (1803—04)、国立図書館東洋写本部主任 Langlès の配慮をえて、写本の文法書と語彙集を研究した。ちなみに、Langlès はツェンベリーの仏訳者である。『日本紀行』四巻, 1796年刊。

シュレーゲルのオリエンタリズムについては、Cf. Schvab, R., *La Renaissance orientale*, Paris, Payot, 1950, pp. 74—86, Gérard, *Op. cit.*, pp. 84—128. また、シュレーゲルのフランス文化との接触の諸相については、E. R. クルツィウス『ヨーロッパ文学評論集』第六章, みすず書房, 1991年を参照。

フランスのオリエンタリズムは1760年代以後しだいに中国からインドに向きを変えてゆくが (Cf. Martino, P., *L'Orient dans la Littérature française au XVII^e et au XVIII^e siècle*, Repr., 1971, Franklin, pp. 181—184), それはフランスのインド支配の野望の高まりという政治状況の遅まきの反映であった。この野望に強力な打撃をくわえて、イギリスのベンガル領有、ひいてはインド支配を確立することになるプラッシーの戦 (1757) が、フランス東洋学の一つの金字塔である *Zend-Avesta* の翻訳を1771年に刊行する Anquetil-Duperron (1731—1805) のルイ十五世の年金受給者としての渡印 (1754) と王立協会会員ジョーンズの最高法院判事としてのカルカッタ赴任 (1783) とのあいだに起こっているのは象徴的なことかと言わなければならない。西欧のサンスクリット研究の進展と比較文法の成立は、植民地支配の進捗と歴史的に照応している。ポップは1816年の著作, *Über das Conjugationssystem der Sanskritsprache...* の改訂第二版をロンドンで英語で発表している

(*Analytical comparison of the Sanskrit, Greek, Latin and Teutonic Languages...*, in *Annals of Oriental Literature*, I, 1820. Newly edited by K. Koerner, Amsterdam, Benjamins, 1974, pp. 14—60)。もっとも、ジョーンズが期待した言語の比較研究そのものはイギリスでは進展しなかったけれども（同じくフランスでも）、それには、植民地の行政的現実に直面して、オリエンタリズムが不可避的にゆきついた民族差別、具体的には、James Mill によって代表される功利主義者たちのインド人とインド文化、その研究と研究者に対する常軌を逸した発言が少なからぬ影響をおよぼしたようである。Cf. Aarsleff, *Op. cit.*, 1967, pp. 139—143.

ネルーが『インドの発見』（辻直四郎，飯塚浩二，蠟山芳郎訳，岩波書店，1956）に、「インドはその過去の文学の再発見に対して、ジョーンズはじめ他の多くのヨーロッパ人学者に深甚なる謝意を表すべき義務を負っている」と述べているのはまことに肺腑を愁えしむる文章であり、その節の末尾に引用された、死を目前にしたタゴールのメッセージに併せて読まれるべきものである。

- 11) Aarsleff, *Op. cit.*, 1967, p. 124. Aarsleff はシュレーゲルの観念論的神秘主義の傾向を指摘して、本書を経験的な言語研究とは見なしえないとする。注5参照。しかし、少なくとも、「言語」の巻が「サンスクリットとヨーロッパの古代の諸言語の類縁について当時発表されたもっとも詳細な分析を含む」(Morpurgo Davis, *Op. cit.*, p. 70) という指摘は重要である。Timpanaro, S., Friedrich Schlegel and the beginnings of indo-european linguistics in Germany (Orig. 1972), in Schlegel, F., *Über die Sprache und die Weisheit der Indier*, New edition, Amsterdam, Benjamins, 1977, pp. xi—lvii は、歴史と言語学史の文脈をよく見通していて、穏当な評価に教えられるところが多いが、批評は全体として厳しい。末尾にいわく、シュレーゲルの著書は「十九世紀の民族誌学，ロマンティックで神秘主義的な精神を拒んでなお、植民地主義的で人種差別主義的な傾向の芽生えを手放さないで、展開しようとする，十九世紀の民族誌学の大きい部分に重大な影響をおよぼした作品である」。Renzi, L., Histoire et objectifs de la typologie linguistique, in Parret, H., *Op. cit.*, pp. 633—657. これは、Timpanaro の論をうけて、言語類型学史の視点から、シュレーゲルの類型論を広い展望の中にとらえるもの。そして、いま引用した Timpanaro の見解に反対する。Koerner の論は，Friedrich Schlegel and the emergence of historical-comparative grammar, in Koerner, K., *Practicing linguistic historiography*, Amsterdam, Benjamins, 1989, pp. 269—290.
- 12) 膠着理論はすでに十七世紀に広まっていたのを、ポップが復活させた。また、シュレーゲルの非屈折語がセム語族をも含むことの問題については、ともに Timpanaro の前注の論文を参照。なお、単音節語，膠着語，屈折語という三分法を最初に問題にしたのは、兄の August Wilhelm の *Observations sur la langue et la*

littérature provençales (1818) [未見] である。

- 13) 『世界史講義』の第一卷第二章「人類の自然地理誌」では、人類の創造の問題を人種の分布と言語の「系譜」の観点から説いて、「言語の二重の起源について哲学で語られていることから、次のことがすぐ明らかになる。〔起源においては〕神的な言語 *göttlichen Sprache* に由来する話し言葉と単に人間的な言語 *menschlichen Sprache* に由来する話し言葉とがあった。神的な言語は完全に純粋な状態には保たれえないが、おおかたはその状態にあり、人間的な言語は自然の音か動物の叫び声の模倣から生まれる。この自然の音の模倣が、〔それを模倣する〕声には、環境の多様さとその後の都合とがもちこまれざるをえないわけだから、未開民族の言語の非常な多様性を説明してくれる。さらに、ほぼ全部の未開言語が目立った多様性を示すにもかかわらず、大多数のものが、なぜわずかに一つの文法しかそなえていないかも明らかになる。というのは、人間の理性は放任しておく、かなりの程度、一つの同じ規則のみを守るのが常だから」と述べている。*Vorlesungen über Universalgeschichte* (1805—1806), in Schlegel, *Op. cit.*, 1960, p. 14.
- 14) Herder, J. G., *Abhandlung über den Ursprung der Sprache*, Reclam, Nr. 8729, 1997 (1772). 引用は, pp. 31—32, 123. *Besonnenheit* は『言語起源論』大阪大学ドイツ近代文学研究会訳, 法政大学出版局, 1972年では, 意識性と訳されている。ヘルダーの起源論については, *Cf. Sapir, E., Herder's "Ursprung der Sprache", Modern Philology, Nr. 5, 1907, pp. 109—142.*
- 15) シュレーゲルは第二卷「哲学について」の第二章「輪廻の体系と流出説」で、「インドの流出説の体系を理性の自然的な発達と見たのでは、まったく説明がつかない」として、流出説の起源に「父なる神」の啓示を認めている。神はみずから創造した、死すべき者に神の本質の無限の深みの洞察と不可視の世界との結びつきとを許して、永生の幸福あるいは災いという「贈り物」を授けたが、その贈り物が流出説に、また、流出説と善悪二元論に由来する迷信、占星術、マテリアリズム、汎神論に時とともに頹落していったのは、「啓示の理解を誤った」からであるとする [SWI. 207—]。これは、明らかに、ヘルダー流の換骨奪胎には異なった説であって、理性の進歩に重要な働きを認めず、啓示をはじめに要請するものである。しかし、そこでは、神話、宗教、哲学が当面の問題で、言語は論じられていない。また、シュレーゲルがインドの宗教と哲学の誤謬と頹落を執拗に論じていること、そのような分析は、旧約聖書を含めたアジアの古代宗教の真の理解はキリスト教を通してはじめて獲得されるという信念に根拠をおいていること、を指摘しておく。第三卷第五章「東洋とインドの研究全般、その価値と目的について」参照。以上の点からいえば、Gérard, *Op. cit.*, pp. 111—121 が、シュレーゲルのインド熱は本書の執筆のころにはすでに冷却していたこと、これが実際には「東洋からの感情的決別の書」であることを詳細に論じているのは説得力がある。付け加えれば、ゲーテは

本書をカトリシズムのマニフェストと見なしていたそうである。ハイネの批評もまたこの線上にある（『ドイツ・ロマン派』山崎章甫訳，未来社，1965年）。

- 16) 生物学的メタファーの研究としては，Percival, W. K., *Biological Analogy in the Study of Language before the Advent of Comparative Grammar*, in Hoenigswald, H. M., & Wiener, L. F.(ed.), *Biological Metaphor and Cladistic Classification*, Philadelphia, Pennsylvania UP., 1987, pp. 3—38.
- 17) Gusdorf, G., *Le savoir romantique de la Nature*, Paris, Payot, 1985, pp. 203—207. 「樹木のパラダイム」の例を引用してある。
- 18) 「生物学」が十八世紀のさまざまな生命現象の発見をへて，自己を確認し，境界を画定するにあたって，ラマルクが果たした役割について簡潔にまとめた，最近の研究として，Cf. Barsanti, G., Lamarck et la naissance de la biologie, in *Jean-Baptiste Lamarck 1744—1829*, sous la direction de G. Laurent, Paris, Edition du CTHS, 1997, pp. 349—367.
- 19) 次の論文の第二部はキュヴィエの比較解剖学を主題的にとりあげて，言語学との関連を研究し，シュレーゲルを論じて，とくにキュヴィエ流のところは何もないという判定から，言語学的再構の問題を考察しているが，シュレーゲルの著書が単なる言語学書でないのは最初からわかっていることで，示唆にとむとはいえ，考察の幅がいわば広すぎる。Wells, R. S., *The Life and Growth of Language: Metaphors in Biology and Linguistics*, in Hoenigswald & Wiener, *Op. cit.*, pp. 39—80.
- 20) Linnaeus, C., *Oeconomia naturae*, in *Amoenitates Academicæ*, vol. II, Stockholm, Salvius, 1751, p. 1. 仏訳は *reciprosos usus producendos* を「相互的な機能」と訳している。Linné, C., *L'Equilibre de la Nature*, traduit par B. Jasmin, Paris, Vrin, 1972, pp. 57—58. リンネのエコノミー思想については，C. Limoges による同書の序文を参照。
- 21) Ray, J., *The Wisdom of God manifested in the Works of the Creation*, Fifth Edition, London, Walford, 1709, p. 17. この書物の内容と意義については，Cf. Raven, C. E., *John Ray: naturalist*, Cambridge UP., 1986 (1942), pp. 452—480.
- 22) Daudin は，キュヴィエのシュトゥットガルトでの修学時代の研究の方向について，「個人的な思索の第一のテーマの一つとして，早くから，当時ドイツや他の国で定石となっていた自然の秩序すなわちエコノミーの概念を自分のものとしていて，〔中略〕おそらく Kilmeyer と一緒にであろうが，〔動物の〕形態と構造のほとんど無限といえる多様性の把握のために，さまざまな力，すなわち，その力を道具としてもちいる諸機能の活動，の比較研究から生まれる共通した分析と説明のしかたを研究する計画を心にいただいていたようにさえ思われる」と述べて，エコノミーの思想が比較解剖学の着想に結ばれるさまを記し，注に，キュヴィエの書簡を

引用している (1788年11月17日付)。その一部を訳出すれば、「ぼくはいま一般博物学のために新しい計画に取り組んでいる。ぼくが思うに、大自然に存在するすべてのものと残りのものとの関係を注意深く研究して、それらのものが宇宙万物のエコノミーの中でどういう貢献をしているかを示さなければ駄目なのだよ」。Daudin, H., *Cuvier et Lamarck—Les Classes zoologiques et l’Idée de Série animale (1790—1830)*, Vol. I, Paris, Félix Alcan, 1926, pp. 57—59.

アリストテレスについては, Cf. Coleman, W., *Georges Cuvier zoologist—A Study in the History of Evolution Theory*, Harvard UP., 1964, pp. 39—41.

- 23) Balan, B., *L’Ordre et le Temps—L’Anatomie comparée et l’Histoire des Vivants au XIX^e Siècle*, Paris, Vrin, 1979, pp. 69—104.
- 24) Nordenskiöld, E., *The history of biology*, New York, Knopf, 1946, p. 339.
- 25) Cuvier, G., *Le Règne animal*, T. I, Paris, Deterville, 1817 (Repr., 1969), p. xix. キュヴィエの機能主義はしばしばアリストテレスの目的論に関係づけて説明されるが、『動物界』の次の文, 「博物学はみずからに固有の合理的な原理を一つもっている〔中略〕それは生存の諸条件という原理であり, 俗に目的因と呼ばれるものである」(Cuvier, *Op. cit.*, T. I, 1817, p. 6.) に見える「生存の諸条件」は注22に引用した青年時代の思索に一層密接に関係していると思われる。なお, 注28, 注30参照。
- 26) 以下のパラフレーズは, 『判断力批判』篠田英雄訳, 下巻, 岩波文庫, 1964年の訳文を, Kant, I., *Kritik der Urteilskraft*, Ed. Suhrkamp, 1974 をテキストとして, 少し変えてある。
- 27) Coleman, *Op. cit.*, pp. 16, 42—43.
- 28) Barsanti の注18にあげた論文は, 1820年代においてなお, ラマルクが「生物学」の主張を一種の抵抗として繰り返している状況について, カントが『判断力批判』第二部第一篇で「生命」の学の自然学(化学, 物理学)からの自立の可能性を否定したことによって, 生物学のパラメータの形成が困難になったからだという読みを示して, キュヴィエの「〔生命の〕現象が〔自然界の一般的法則と〕まったく異なった秩序に属していると結論することは誤りであろう」[LAC. 8—9] という留保の文章を引用している。キュヴィエにとっては, 生命体の研究がまだ進んでいない以上, 理論の体系は問題にならず, 経験的なデータの提示が重要であった。「有機体のエコノミーについてのわれわれの研究の一切はその記述 *histoire* をなすことに帰するだろう」[LAC. 9]。
- 29) Koerner, Preface to Schlegel, *Op. cit.*, 1977, p. vii.
- 30) この点にかかわって, Gillispie が近年の論文で, キュヴィエとラマルク(さらに, ジェフロワ・サン＝ティレール), それぞれの理論あるいは哲学は, 綱から属にいたる下位階層の分類の実際になんら影響をあたえていないこと, すなわち, 両者

は、相反する理論的立場にあるにもかかわらず、お互いの仕事を絶えず参照しつつ、動物分類学という一つの科学に参加していたこと、それは、革命期の改組によって成立した国立自然誌博物館という制度の枠組と志向の内実とによって可能となったことを指摘しているのは興味深い。そして、博物学（分類学）が生物学にすだいに変貌してゆく要因として、かれらが、ダーウィニズムの到来とともに「適応」と呼ばれることになる現象の研究にたずさわったことをあげて、同時代のコントの生物学思想に言及しているのは、重要な指摘である。Gillispie, Ch. C., *De l'histoire naturelle à la biologie: relation entre les programmes de recherche de Cuvier, Lamarck et Geoffroy Saint-Hilaire*, in Blanckaert C. et al. (ed.), *Le Muséum au premier siècle de son histoire*, Paris, Editions du Muséum national d'Histoire naturelle, 1997, pp. 229—239.

- 31) ヤコブソンはシュレーゲルの試みを簡単明瞭に「失敗」と断じている。Jacobson, R., *Essais de Linguistique générale*, Paris, Minuit, 1963, p. 69. 最近の言及として、Shibatani M., & Bynon, Th., *Approaches to Language Typology*, Oxford UP., 1999, pp. 1—3.